

はじめに

「石の墓を作る前に、紙の墓を作ろう」。自分史を広めた功労者の一人福山琢磨の言葉である。「紙の墓」を「紙の銅像」と言い換えると、ニュアンスが微妙に変わってくるのではないか、というのがこの言葉を目にしたときの私の第一印象であった。

IT元年の年、私はボランティアとしてNPO団体主宰の高齢者向けパソコン教室の講師を約一年間務めた。パソコンを習得したいと願う人たちの多くは、趣味である写真、絵、川柳などの成果を整理する手段として、あるいは発表する場として活用したい、メールで送られてきた孫の写真を自分で見られるようになりたいなど、明確な目的意識を持つての受講であった。従来型のパソコン教室はパソコン操作の習得に重点が置かれているため、受講者一人一人のニーズに応えることは難しい。私もはじめはテキストを使った一斉指導をしていたが、それと平行した形で、一人一人の受講者のニーズに応えるために個人指導も行うようになった。そういう中で、パソコンを使って自分史を書きたいという受講者に出会った。自分の人生の記録を残したい、孫に読んでもらいたい、と望む高齢者の真摯な眼差しや、どのように表現したらよいかと悩み試行錯誤をくり返す姿がそこにはあった。それまでは「自分史」という言葉の存在を認識しているだけであったが、実際に自分史を書きたいという人に接したことで、自分史の成立過程を辿りつつ、人は何故自分史を書くのかについて、分析、研究しようと思いついたのである。

一九八〇年代後半からのブームを経て、「自分史」は定着し、今や新しい段階に入ろうとしている。自分史と戦争体験がニアリーイコールというイメージの自分史から、最近新しい形態の自分史も登場してきている。地方自治体、カルチャーセンターなどで開講される「自分史」の講座数も増加の一途をたどり受講者も多い。近年自費出版も盛んになってきており、自分史を自費出版する人も珍しくなってきた。しかし活発な動きを示す自分史の現場とは異なり、自分史の研究はまだ始まったばかりである。自分史という自己歴史が浅く、自分史学会はできたものの、未だ成果を上げるところまでには至っていない。自分史という用語を作り理論付けをした色川大吉、自分史文化論という視点で理論と実践の両面から研究を続けている吉澤輝夫らをはじめとして、社会学、特にライフヒストリーの分野からの方法論など注目すべき研究はいくつかある。歴史学、ライフヒストリー、自伝、文学など様々な分野からのアプローチはあるものの、自分史の定義も定まっていないのが実情である。

本稿の目的は、自己表現の一方法としての自分史が現在抱えている問題点を明らかにし、今後の自分史の進むべき方向性を示すことにある。理論的な面のみならず、自分史の現場の取り組みにも触れることにより、立体的に自分史を見ていきたい。第一章では、自分史成立以前の主たる自己表現の手段であった作文教育の歴史を見ていき、自分史が作文教育の流れの中でどのように浮上してきたかを明らかにしたい。第二章では自分史の現場での取り組みの変遷を見ていき、現在の自分史の実践現場である文章教室の例として、日本自分史センターの取り組みを詳しく検討したい。第三章では自分史定着の過程と様々な分野における自分史の捉え方を明らかにし、自分史の問題点でありキーワードでもある「読者」と「虚構」の問題に迫りたいと考えている。